

「対話」と「会話」
—「話しことばの育み」のために—（2000年）

牧戸 章

はじめに

話しことば指導の重要性は繰り返し主張され、実践レベルでの指導の工夫も重ねられて来た。しかし、学習者が確かに聞いたり話したりすることができるようになって来たという確信を持ってない。今までと同じことを繰り返していても、この状況を変えることは難しいであろう。

小論では、これからの「話しことばの育み」、さらに「ことばの学び」を考えるために、「対話」と「会話」をどう区別するのかという視点を据えてみたい。

I

これまでの国語(科)教育では、「対話」と「会話」とをどのように位置づけていたのだろうか。辞書類から手がかりを得ることにする。まず、音声言語指導大事典(一九九九年)明治図書)である。現時点では一番新しくしかも「音声言語指導」を掲げる「大事典」である。項目を探してみると、「会話」は無く、「対話・対談」が有って、「二人の人が向かいあって話をすること。またその話一般的に対話は、日常生活の中で双方が心を通わせながら交わす会話をさす。」と説明がある。「対話」の説明の前提として「会話」が有って、「二人向かいあって・日常生活・心を通わす」が「対話」を特徴づける重要な要素であるようだが、類推すると「会話」のなかのそういう要素を含むものを「対話」と位置づけるようである。つまり、「対話」は「会話」に包含され、ある特徴を有した時に、「対話」となるという解説である。それはそれとしてある一定の説明となっているが、特別に区別して使う必要があるとは思われない。その他の国語教育の専門書を見てみよう。

(「国語教育研究大辞典」国語教育研究所(一九八八年)明治図書)では、その項目に「対話」は無く、「会話」として「対面コミュニケーション、つまりお互いに顔の見えるところで行う話しことばを中心とする談話行動の一種。」と説明がある。ここで

も、会話と対話とをそれほど区別する意識はないとうかがえる。「二人での話し合いを『対話』、3人以上のものを『会話』として特に区別する立場(西尾実など)もある。」としながら、「要するに、会話(対話)というものは、すべての対面的コミュニケーションの基本であり、これは、①親しい関係にある、二人または少人数の人が、②特に話題を決めて行うのではなく、③自由な雰囲気、④話し手と聞き手とがお互いに随時交換し合いながら、なされる話し合いということになる。」としている。

(「国語教育指導用語辞典」(一九八四年)教育出版)では、項目としては「会話」「対話」とともに無いが、「話し合い、討議」の囲み記事に「対話」のみ「一対一で向かい合って自由に話し合うこと。」とある。

(「国語科重要用語 300 の基礎知識」(一九八一年)明治図書)では、その項目に「会話」は無く、「対話・対談」が有って、「対話は、一対一で行われる話し合いで、最も基本的、生活的な談話形態である。」となっている。

こうして見てみると、国語(科)教育の専門用語として「会話」「対話」とともに概念が定まっているとは言えない。

II

「会話」と「対話」とを明確に区別したのは、先の辞典にもあったが、西尾実の分類によるものであろう(注1)。

談話の形態は三つに大観される。談話の基本形態は対話であるが、ほかに会話と独話が区別される。

談話の形態は、まず話し手と聞き手との関係が、話し手と話し手、聞き手は聞き手として固定するばあいと、話し手と聞き手とが交互に交換するばあいとによって、独話と対話・会話との別が生じ、聞き手の数が、一人であるか、二人以上であるか、またはある集

団であるかによって、対話と会話と独和との別が生じる。さらに、その聞手の性質が、話手と何らかの人間のつながりが予想できるばあいと、そういうつながりが予想できない集団であるばあいによって、対話・会話のような個人的通じあい(personal communication)と、独話のような集団的通じあい(mass communication)との別が生じる。表示すると、

対話	1 ⇄ 1
会話	1 ⇄ 多
独話	1 → 集団

のような関係に要約される。

言語生活の概念を持ち込んでいちはやく話しことばの指導を国語教育学に体系的に位置づけた影響力は大きく、対話は一対一で行われるという定義は広く浸透している。そのために、「対話の定義については、一対一の形で相対して互いに聞き合い話し合う、という点では諸説が一致して」いる。と位置づけられている場合もある(注2)。

一対一というのは「談話の形態」による定義づけであったが、機能として考えると、独話の中にもあり、会話の中にもあるものではなかろうか。このような考え方を以前わたしは提示したことがあるが、それをいま整理してみると次のようになると思う。

独話というものの極限は、自己内対話である。自己内対話というのは、論理、思考力を媒介として自分に聞かせながら話す、自分の内なる聞き手の反応を打診しながら第一の自分が話していく、ということである。話すことは聞くことである。自分の心の中に、よい聞き手がいないと、立派な話し手にはなれない。自分の精神の内部が屈折していて、いい反響をもたらしてくれるような聞き手が心の中に育っていないと、いい話し手にはなれない。つまり、人間の内部に問題があつて、自己内対話が成立しないと、よく話すことができないのである。このように考えた時には、対話ということのもっとも拡大した解釈の端に、自己内対話がある。自己内対話の反対の極には(対話を拡大解釈した場合に)、会話がある。会話というのは、対話が無秩序でとびかうものである。対話と会話とは、形態的には違うが、機能としては、結局、

会話は対話の変形とみることができる。これは会話だ、と言っても、結局はAという人間と、B、C、Dという人間たちとのあいだにはたらくものは、対話と同じものである。こう考えると、すべてのもの対話ならざるはない。

というように捉えられてもいる(注3)。この考え方も現在まで引き継がれており、

対話という言葉には、立場の違うもの同士が、その違いを乗り越えて歩み寄ろうとする決意が感じられる。対話能力は、異質な考え方を持つ者同士が立場を越え国を越えて相互に助け合い共存を図る、共生時代を支える能力であろう。

というように現代的対話能力の位置づけが行われる(注4)。ただし、この刊行図書においても、「教師対生徒の一対一の対話を教室に持ち込むことは、教師が生徒とのコミュニケーションのありようを問い直す契機となる意味でも価値がある。」とあり、形態としては「一対一」の対談を想定している(注5)。

しかし、「自己内対話」を想定したり、対話を「共生時代を支える能力」と捉えたりするとき、「一対一」という形態にこだわる必要があるのだろうか。人間が対面して「一対一」で話し合い、聞き合わなければならない。しかも、それを教室のような集団の中で行わなくてはならない。そのような場面は実際の日常生活ではほとんど生じることはないであろう。「一対一」という形態が、むしろ学習のあり方を拘束して不自然で不自由なものにしてしまわないだろうか。

III

劇作家・演出家の平田オリザは、「対話」概念に新しく合理的な視点を提出している。「演劇のために、『意識』という視点で話し言葉を分類してみた」という「話し言葉の地図」の一覧表の形で表しているが、意識的から無意識的にむかって、演説/談話/説得・対論/教授・指導/対話/(挨拶)/会話/反応・叫び/独り言

と類別される。これはまた、公的から私的へという流れにも位置づけられている。それぞれについて、

英語/発話者・数/相手数/知己/聞く意志/場所/最初の言葉(一例)/長さ/結果/冗長

の各項目からそれぞれの種類の話しことばの特徴を提示している。「対話」については、

dialogue/不足・複/不特定少数/他人/中/ロビー/私は/中/共感/大

「会話」については、

conversation/家族・複/ごく親しい知人/弱/居間/あのさー/短/確認/小

とされている。このことの具体的説明として、

話し言葉の種類は多様だが、その中でも、演劇を支えているいちばん大きな要素は、「対話」である。

注意しなければならないのは、「対話」と「会話」の違いである。あらかじめ、簡単に定義づけておくと、「対話」(dialogue)とは、他人と交わす新たな情報交換や交流のことである。他人といっても、必ずしも初対面である必要はない。お互いに相手のことをよく知らない、未知の人物という程度の意味である。

一方、「会話」(conversation)とは、すでに知り合っている者同士の楽しいお喋りのことである。家族、職場、学校での、いわゆる「日常会話」がこれにあたる。

英語では厳然と区別される二つの単語が、日本語では非常に曖昧な扱い方をされる。ここに、戯曲を書くうえでの、一つの大きな落とし穴がある。講座に集う多くの生徒は「対話」ではなく、「会話」を書いてしまうのだ。だが、「会話」だけでは、戯曲は成立しないのである。

なぜ近代演劇において、もっとも重要な要素となるのだろうか。(中略)日常会話のお喋りには、他者(観客)にとって有益な情報はほとんど含まれていない。家族内の会話だけでは、お父さんの職業さえ観客に伝わらない。

演劇においては、他者=観客に、物語の進行をスムーズに伝えるためには、絶対的他者である観客に近い存在、すなわち外部の人間を登場させ、そこに「対話」を出現させなくてはならないのだ。

としている。

「演劇のために」としているが、この「意識」による話しことばの分類、とりわけ「対話」と「会

話」との明確な区別は、国語(科)教育におおきな示唆を与えてくれる。

話しことばによる「伝え合い」はまた、聞き合いでもあるが、その一番の意義は、経験・価値観・世界観の違う人同士が共感し共生する場を生み出し、また、そういう交流ができることであろう。そういうコンテクストの違う者同士が、その「コンテクストを摺り合わせる」ことである。ここで必要なのは「コンテクストを摺り合わせる」ことができる「他者」の存在である。初対面の人などは、「他者」ということがすぐわかるが、「他者」とはそれに限定されない。よく知っていると思っ

ている人であっても、新しい側面や違った側面を発見したりする場合がある。その場合、それまで持っていた人物像が「ずれ」ることになり、「他者」として立ち現れることになる。このことは、自己内においても同じである。「自己内対話」が成立する時、その時々「自己」があるように、その時々における「他者」が存在する。しかも、その「他者」は心の中に浮かんでくる、あるいは潜んでいる複数の「他者」から意識的にも無意識的にも選択される。「対話」する聞き手であるもう一人の自分という時の、「もう一人」は固定されたものではないということである。

このように捉まえると、「会話」が進行している時に、それが「対話」になったり、逆に「対話」だと思っていたものが「会話」になってしまったり、さらに、一見「会話」のように見えて「対話」が成立していることもあったりすることがわかる。

先にも「一対一」で対面するという話しことばの形が不自然であるということを指摘した。はじめから、これが「対話」です。このように話し聞きましょう。とか「会話」として話しましょう。というのは、非常に限定的に用いる以外はたとえそれが教育の場であっても、やはり不自然で不自由なものであることが改めて示唆されるのである。

IV

書きことばの獲得は、近代日本の国民となっていくために、そのこと自体が問い直されることなく教育が続けられてきた。第二次世界大戦後も継続される方向から、「表現力」が不足していると

指摘され続けている。書きことばの獲得は、近代学校教育を中心となって特色づける課能であった。しかし、学校教育の再生を図ろうとしている状況では、新たな書きことばの獲得と共に、新たな話しことばの獲得が大きな課題となるであろう。

対面して「他者」と視線をそして言葉を交わすことは、互いに身を晒し合うことになる。その関係性は、主体—客体というものではない。複数の「他者」を自らのなかに孕んでいるように、対面している相手のなかにまた「自己を発見する関係にある。そのような「他者」や「自己」を発見すること、そして、それまで持っていた人間像や世界観とのずれを感じ取り、折り合いをつけて新しい人間像や世界観をつくっていくことが、新しい学びとなるのであろう。そのような場面・世界をつくるのが可能となるひとつの視点が「対話」であると考えられる。

しかし、そのように互いに身を晒し合うことは非常に厳しいことである。常にそのような場に置かれたら、身がもたなくなってしまう。そういう時に、人は晒し合うことをやめる、その場を降りるのであろう。そして、それが繰り返されると、意識的・意図的に停止するのではなく、自動的に停止してしまうようになり、降りていることにも気づかなくなるのである。

そのような場を作り上げてきたのが近代学校教育であった。学校教育再生のためには、「対話」を視点としながら、晒し合う関係性を意識した「話しことばの育み」を「ことばの学び」の柱として組織していく必要があるだろう。その時、「対話」の晒し合う関係性に虚構の世界を持ち込むことが重要になってくる。つまり、身体としての「自己」「他者」と意識としての「自己」「他者」を〔ずら〕したところで「対話」の関係性がつくられることで、その「対話」自体を検討・吟味することができるようになり、そのことがまさしく「ことばの学び」となるからである。

おわりに

話しことば指導を学校教育の中で確かに位置づけるための視点として、(「会話」と区別した)「対話」の重要性を述べた。具体的な指導のあり方については稿を改めて提示することができればと考

える。

注

- 1 西尾実(一九五〇)『国語教育の構想』筑摩書房、五〇頁。
- 2 森久保安美(一九九七)『話しことば教育の実際』東洋館出版社、一七三頁。
- 3 倉澤栄吉・青年国語教育研究会(一九七〇)『国語科対話の指導』新光閣書店、二三~三四頁。
- 4 福岡教育大学国語科・福岡教育大学附属中学校(一九九七)『共生時代の対話能力を育てる国語教育』明治図書、一四頁。
- 5 注4に同じ、一七頁。
- 6 平田オリザ(一九九八)『演劇入門』講談社現代新書、一一七~一二二頁。

参考文献

- 1 マニユエル・レヴィナス(一九四八)『時間と他者』(原田佳彦訳・一九八六)法政大学出版会
- 2 エマニュエル・レヴィナス(一九六一)『全体性と無限』(合田正人訳・一九八九)国文社
- 3 エマニュエル・レヴィナス(一九七二)『他者のユマニスム』(小林康夫訳・一九九〇)水声社
- 4 エマニュエル・レヴィナス(一九八七)『外の主体』(合田正人訳・一九九七)

編集部注 初出

『月刊国語教育研究』.35(341);2000・9 日本国語教育学会 編